



2011年4月13日放送

## 漢方頻用処方解説 麻黄湯①

富山大学大学院医学薬学研究部和漢診療学講座

藤本 誠

漢方頻用処方解説シリーズ、麻黄湯の第1回目です。

はじめに麻黄湯の紹介をいたします。エキス製剤における効能・効果は、悪寒、発熱、頭痛、腰痛、自然に汗の出ないものの次の諸症：感冒、インフルエンザ（初期のもの）、関節リウマチ、喘息、乳児の鼻閉塞、哺乳困難とあります。

麻黄湯を使用するときの目標ですが、体力が充実している人の熱性疾患の初期で、頭痛、発熱、悪寒、腰痛、四肢の関節痛などがあり、発汗を伴わない場合に用いるのが一般的です。ただし、この「平素から丈夫で体力が充実している」というのは、見かけの「頑丈さ」とは必ずしも一致しません。四肢の関節痛があることと、発汗を伴わないという所見がとても大事です。腹証についてですが、急性熱性疾患のような場合は、腹証は考慮しません。一方、関節リウマチの時などの慢性疾患の場合は、腹力は中等度かそれ以上の強さであることが多いです。

麻黄湯は『傷寒論』に記載されている漢方薬です。条文の解説をいたします。太陽病で、つまり脈が浮いていて、頭と項が痛んで、悪寒がある。そして発熱していて、体が痛み、腰も痛み、関節も痛み、汗をかくことなく、咳が出る。このようなときには麻黄湯で治療しなさいと言っている。この条文が最も標準的な麻黄湯の証を表しています。

次は、太陽病と陽明病との合病の条文です。合病とは、一つの病期のみでなく二つ以上

の病期にまたがる症状が見られますが、1種類の薬方での治療により症状が改善されるもの  
のことを言います。合病というのは、太陽病、少陽病、陽明病の間でしか成立しません。  
太陽病と陽明病の合病になり、咳が出て胸が詰まったようになった場合は、陽明病の便秘  
の症状があったとしても下してはいけません。このような時は麻黄湯を使ってみるのがよ  
ろしい、と言っています。

次の条文です。傷寒にかかって、脈が浮緊で、自然発汗しないために、鼻出血が出る。  
そのような人には麻黄湯を与えなさいと言っている。麻黄湯は大青竜湯や葛根湯と同じく、  
太陽病期・実証の方剤ですから、治療原則は解表、つまり発汗させることです。発熱・悪  
寒・体の痛みがあって、汗をかかないで鼻出血が見られる症例には麻黄湯を与えなさいと  
言っている。麻黄湯を与えることによって、発汗できれば鼻出血も止まるし、傷寒も癒え  
るということです。

次の条文です。太陽病で脈が浮いていて緊状である。この浮緊の脈は病の主座が表証に  
あって、かつ実証であることを示しています。汗が出ない、発熱していて体が痛い。傷寒  
にかかってかれこれもう8日、9日たつて少陽病期になってもおかしくない時期なのに、寒  
気などの表証がまだ残っている。そのような人は煩わしい感じがして、めまい感が出てく  
る。そして激しい人は必ず鼻出血が出る。このような場合は麻黄湯で治療せよと言ってい  
る。麻黄湯を使うべき症例全員に鼻出血が見られるわけではありません。

大塚敬節先生は著書の『臨床応用傷寒論解説』（創元社、1966）の中で、「劇しき者は必ず  
衄す」は麻黄湯を服用した結果としてみられる所見であると解説されています。太陽病期  
の治療を行った時、治療の経過として発汗の代わりに鼻出血が出ることがあるというこ  
とです。

麻黄湯の構成生薬とそれぞれの効能について解説します。

麻黄湯は4種類の生薬で構成されています。麻黄、桂皮、甘草、杏仁の4種類です。

麻黄の作用は、発汗、平喘、利尿です。これらの作用によって、体表面の熱と水を巡ら  
せます。麻黄にはエフェドリンが含まれていますので高血圧や虚血性心疾患の症例には慎  
重な運用が必要です。麻黄で胃もたれする症例もあります。

桂皮の作用は、発汗、止痛、利尿、温通、鎮静です。これらの作用によって体表の気を  
巡らせて、発汗させます。『傷寒論・金匱要略』には生薬名が「桂枝」なのですが、「日本  
薬局方」で規定されている生薬名は「桂皮」です。

甘草の作用は、滋養、消炎、止痛、調和、鎮咳です。咳嗽を鎮めて、構成生薬全体を調  
和させます。

杏仁の作用は、鎮痛・去痰・通便が知られています。杏仁はあんずの種なのですが、杏  
仁豆腐に使うのは甘みのある甜杏仁（てんきょうにん）のほうで、生薬として使う杏仁は、  
苦みのある苦杏仁を使います。杏仁は粘稠痰が見られる時の使用に適していて、肺をうる  
おして去痰します。

次に個々の生薬の効能ではなく、ここでは麻黄湯を構成する生薬の組合せについて説明します。

麻黄湯には、麻黄と甘草の組み合わせと桂皮と甘草の組み合わせが存在します。『金匱要略』には甘草と麻黄とで構成される甘草麻黄湯、『傷寒論』には桂枝と甘草とで構成される桂枝甘草湯という薬方が存在します。それぞれどのような効能があるかと言えば、甘草麻黄湯は、その条文には「皮水という、脈が浮いていて、圧痕が残るような浮腫があつて、寒気の自覚はなくて、腹が張って、口渴がない症例には越婢加朮湯が適応であり、甘草麻黄湯もまた適応である。」と書かれています。

煎じ薬でしか使えませんが、現代では喘息発作時に頓服として用いられることが多い方剤です。麻杏甘石湯や神秘湯にもこの組み合わせが含まれています。

そして桂枝甘草湯は『傷寒論』に「発汗過多、其人叉手して自ら心をおおい、心下悸し、按を得んと欲する者は、桂枝甘草湯主之。」とあります。

発汗がすぎて、気が上衝して動悸がして、両手を組み合わせて心胸部を圧迫して、心下の動悸を鎮めようとするものは、桂枝甘草湯の主治であるとあります。桂枝甘草湯は気逆の治療の基本方剤です。気逆の症状が見られる方剤、桂枝湯もそうですが、苓桂朮甘湯、桂枝人参湯、桃核承気湯などにもこの組み合わせが含まれています。

最後に古医書における麻黄湯の記載について紹介します。

一つ目は尾台榕堂の『類聚方広義』からです。麻黄湯についての記載はとても多いので全部は紹介できませんが、一部をご紹介します。

「新生児で時々発熱して鼻が詰まって通ぜず、乳を飲むことが出来ない者に、麻黄湯を服用させると直ちに治る。麻疹で、脈が浮・数で発熱し、体が痛くて、腰も痛んで、喘咳があつて、表が塞がって、発疹がいつせいにそろわない者を治す。喘息で、痰が多く出て、声が出ない。肩をもたげて腹をしぼって、横になることもできない。悪寒がして発熱して、脂汗をかくような者には麻黄湯に生姜半夏湯を合方するとたちまち効果がある。」このようなことが記載されています。

新生児はほとんどの場合、新陳代謝が旺盛で、実証と取れることが多い。新生児の鼻閉には、麻黄湯エキスをお湯で湿らせた指先に付けて、上あごに付けてやると効果が得られることが多いです。

次に浅田宗伯の『勿誤薬室方函口訣』からです。

「麻黄湯は太陽病期・無汗の症例に用いる。張仲景は、発汗剤である桂枝湯と麻黄湯の使用区分を厳重に指示しているのであるから、守らなければならない。風寒によって喘息を発するものには麻黄湯を用いれば速やかに治癒が得られる。朝川善庵はこの方のみで喘息を防ぐという。」

張仲景とは『傷寒論』を著したとされる人物ですが、浅田宗伯は、桂枝湯については「肌

膚開いて汗出で、脈浮緩なる者」として、麻黄湯を「皮膚閉じて汗なく、邪、骨節に迫りて疼痛、脈浮緊なる者」として解説しており、この区別を守って治療せよと言っています。以上で、麻黄湯の解説を終わります。